

『太平記』外伝二題

— 笠置合戦に纏って —

青木 晃

(一)

南朝の元弘元年（一二三二） —

八月、天皇神器を持ち、京都より奈良・笠置寺に逃れる。

六波羅軍、叡山攻撃。

九月、笠置陥り、後醍醐天皇捕われる。

一〇月、後醍醐天皇、神器を光厳天皇に渡す。

赤坂城陥る。

『日本史年表』（岩波書店刊）に斯くある。後醍醐帝皇胤の太平記構想上、その前三分の一部における笠置合戦一連の記述は、よく考えられ、仕組まれていると読める。

叡山臨幸を偽装しつつ、自らは女房の如くして賤しい張輿に

召し南都（奈良）参詣とみせて脱出、しかし東大寺東南院にも居られず、和東の鷲峯山（山城）ごとき山奥を経めぐり、ついに笠置寺に落居された後醍醐帝の悲運、これが第一である。

笠置における帝の夢にて、楠正成との出合いはあったものの、幕府勢二十万の総攻めには楠は助勢にも駆け付けず（？）、結局「主上御没落笠置事」（太平記、卷三）となってしまう。

北に向って木津川対岸の有王山（山城）山麓あたりまで、「未習ハセ玉ハヌ御歩行」にて裸足に血にじませつつさ迷い出た後醍醐帝は生捕られ、一旦南都内山（永久寺）へ入れられた後、宇治から六波羅へと送られ、やがて隠岐配流の運命をたどられるのであった。これぞ帝の大悲運。

『太平記』が記す笠置合戦の間隙から、やがてあれこれの風説が漏れ出し、狭くあるいは広く流布していったと考えられるこ

とは、歴史の先例と同じである。

(二)

木津川ノ瀬々ノ岩浪早ケレバ

懸テ程ナク落ル高橋

これは、後醍醐帝が笠置にご座あると知って、「六波羅ノ兩檢断、槽谷三郎宗秋・隅田次郎左衛門五百余騎ニテ宇治ノ平等院へ打出テ、軍勢ノ着到ヲ着ルニ、催促ヲモ不得、諸国ノ軍勢夜晝引モ不切馳集テ十万余騎ニ及ベリ。」という状況のもと、高橋又四郎が抜懸けの高名を目論み、みごと失敗した折の宇治橋詰に立った落首である。笠置城勢は北面の崖を木津川辺まで攻め下って、高橋勢を討ちのめしている。

激戦膠着の中、雨風はげしき九月の暗夜、備中の陶山藤三義高・小見山次郎が先懸けして城中に忍び入り、火を放つて遂に落城するに至る。その折、城の北面の「石壁ノ数百丈聳テ、鳥モ翔リ難キ所ヨリゾ登リケル。」とあって、その用心に「差縄ノ十丈許長キヲ二筋、一尺計置テハ結合々々シテ、其端ニ熊手ヲ結着テ持セタリ。(是ハ岩石ナドノ被登ザラン所ヲバ、木ノ枝岩

ノ廉ニ打懸テ、登ラン爲ノ支度也)」とある。あくまで、木津川を越えての北からの正面攻撃である。

しかし……現地に立つて地勢をみるに、東か西か側面から登攀を考えれば、南は柳生に通ずるゆるやかな丘陵に出る。

風雨の暗夜、地理にくわしいこの地の者が手引きをすれば、城郭南方から容易に忍び入ることができたのではないか。帝の悲運をともに嘆き、後醍醐皇胤の人々は慷慨しきりに斯く疑ったこともあつたらう。

やがて、北条幕府軍を手引きしたものがあつたという風説が流行し、特定されて種々の差別を生んでいったと聞く。その地は木津川上流、笠置山麓域の集落Aであつた。

(三)

更に木津川上流、大河原駅(JR関西本線)に近く一本の沈下橋が架っている。橋の名は「恋路橋」、伝承によると、笠置へ落ちられた後醍醐帝を慕ってここまで追いつた寵姫が、帝にも逢えず自ら病をえて、この地に命絶えたという。姫を祀つて「恋志谷神社」、恋する心に身を焦がしたり、病の身に苦しんだりせぬよう守り神になろうと遺言した(恋志谷神社口碑伝説)

というので、今日では子授けや婦人病平癒の神として信仰を集め、橋も渡つて参詣すれば恋が成就すると利益をいわれているようだ。

しかし、笠置合戦に関して『太平記』にはかような女人の影は全く見えず、ここに祀られる姫が何者であるか、未詳である。ただ、後醍醐帝隠岐配流の道すがらに、慕う女人（内親王という？）との別れという類型は以前に私が報告した。

ところで、この神社の名の「恋志谷（こいしだに）」、現地における現代の呼称はこうあるが如何なものであろうか。日本語の響き、特に近世語の洒脱な味わいなどからすると、〈こいしや〉ではないか、私にはそう思われる。

(四)

笠置を中心に木津川流域を経めぐる、『太平記』外の大小太平記遺跡に出会う。

和束の南に「駒返し岩」なるものがある。笠置の後醍醐帝救出に向つたが失敗、ここから引返したと現地ではいう。

作品として結実していなくても、風説として人々の心に流れていけば、その総体が歴史であり、民族の心Ⅱ風潮であると私

は考えている。

★『太平記』本文は、岩波・古典大系本を使用。

（傘寿有一の年に）

（あおき あきら／本学名誉教授）